

【がじら】

「かいじゅうも、おばけかのう」

ぼくはききました。

「金ちゃん、怪獣映画でも観たのですか」

懐爺は呑気そうな声でいいました。

「いんや、ざっしでみた。こうみんかんには、かいじゅうのでてくるざっしが、いっばいあるでな」

村の公民館は、図書館を兼ねています。

「ああいう雑誌に載っているのは、みんな架空（かくう）の怪獣です」

懐爺は偉そうにいいました。

「かくうも、げんじつも、わしのばあい、おなじことじゃ」

「まあ、金ちゃんは特別ですからね」

微妙な笑いを残したまま、懐爺は祠に消えようとしてました。

「わしのしつもの、こたえが、まだじゃ」

ぼくは懐爺の足にしがみつきました。

「そんなことしなくても、ちゃんと答えますよ。怪獣はおばけです。金ちゃんは、いままでも、幽霊とか妖怪ばかりでなく、怪獣にも遭遇しているはずですよ。では、さようなら」

「ちょっとまでや。そうぐうしたって、わしが、いしきしなければ、かいじゅうじゃなからう」

「金ちゃんも、だいぶ理屈っぽくなりましたねえ。それでは、おやすみなさい」

「ちょっとまでや。かいじゅうは、うえからしたまで、かいじゅうじゃろ。なぜに、おばけいうんじゃ」

「それは金ちゃんのご自分で、今いったでしょう。怪獣はおばけだと意識すれば、それはおばけなんです」

「ならば、かいじいは、かいじゅうたいじも、できるんじあのう」

ぼくは憧れの懐爺を、わざと憧れた顔を作って見ました。

懐爺は祠にはいるのを、諦めたふうでした。

「怪獣といっても、千差万別（せんさばんべつ）、富士山くらい巨大な怪獣には、わたしも歯が立ちません」

「けんそんするでない。ふじさんくらいの、だいかいじゅうなら、かいじいも、あいてにとって、ふそくはあるまいからのう」

「でも、巨大なのは苦手ですねえ。若い頃、大山くらいの怪獣、これは恐竜のばけもの【きどら（鬼怒羅）】

でしたが、その退治を渋々請け負って闘い、なんとかやっつけたときに、倒れた【きどら】に押しつぶされて、半死半生になりました」

この話は村長にきいたことがあるが、渋々はきいたことがあっても、半死半生と

はきいていない。

「だいじょうぶじゃ。ぶたくらいじゃ。というより、ぶたに、よろいをかぶせたくらいじゃ」

「豚ですか。ああ、そういうことならそうと。金ちゃんたら、鎧を身に付けた豚の怪獣に、遭遇してしまったのですね」

「そうじゃ。だからここに、きたんじゃろうが」

「それを先にいってくださいよ。その豚怪獣は、【がじら】でしょう。漢字だと、〈餓児羅〉と書きます。腹すかしの怪獣ですから、油断すると食われます」

「たしかに、わしを、くいたそうじゃった」

「でも、怪獣は田舎の村には、基本的にでないことになっているんですがねえ。地方都市によくでるんです。統計によれば、仙台、札幌、盛岡、それと」

「きほんも、えろほんもあるかい。その【がじら】が、うちのにわで、ぶうぶうぶたぶた、いっとるんじゃ」

「なにか、文句でもあるんですかねえ」

「くいものよこせ、かのう」

「なら、仲間にもらいなさいと、金ちゃんからいってください。【がじら（餓児羅）】の仲間は、【へじら（屁痔羅）】【くじら（苦時羅）】【じばら（爺婆羅）】【まじら（真面羅）】【せじら（世辞羅）】など、沢山いますから、心配ありませんよ」

「なかまも、【がじら】のくいけに、あきれとるんじゃないかのう」

「それでも、怪獣は仲間思いですから」

「だどものう、へばかりこいて、じになるかいじゅう、しろくじちゅう、くるしんでおるかいじゅう、じじだかばばだか、わからんかいじゅう、まじめくさったかいじゅう、おせじばかりいっとるかいじゅう、みんなきよったら、そらあ、うるそうてかなわん」

「それはそうですね。なら、【がじら】にこう教えてください。そんなに重い鎧を着ているから、すぐに腹がへる。さっさと鎧を脱ぎすてなさい、とね」

「りょうかいじゃ」

ぼくはすぐに帰って、庭の【がじら】にそう告げました。

すると【がじら】は、ぶうぶうぶたぶたいいながら、それでも素直に、おもむろに、鎧を脱ぎ始めたではありませんか。

すっかり脱ぎ終わると、そこには、もはや【がじら】の姿はなく、鎧ばかりが転がっていました。